

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第十六主日C年

小西広志

2022年7月15日

朗読箇所

第一朗読 創世記 18 章 1-10a 節

第二朗読 コロサイ 1 章 24-28 節

福音朗読 ルカ 10 章 38-42 節

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年7月17日年間第十六主日となっております。今日の三つの朗読箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

榿の木

今日の第一朗読は『創世記』からです。「榿の木」という小さな単語に注目してください。アブラム（アブラハム）は弟ハランが死に、そして父テラも死んで、自分には跡継ぎがないという状況で人生に途方に暮れました。そんな時に神さまと出会ったのです（12章）。神さまの祝福とことばに信頼をおいて家を捨て、生まれ故郷を後にします。そして神さまが示された土地に向けて旅立ちました。到着したところがヘブロン地方のマムレという土地です。「アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの榿の木の所に来て、その傍らに落ちていた」（13章18節）とあります。マムレには「力強い」という意味があるそうです。そして榿の木は頑丈さを象徴する木だそうです。昔の人々は、雷を避けるために榿の木の近くに好んで住んだそうです。榿の木がもたらす木陰は安息を人間に与えてくれます。その実であるドングリは食料、いのちの糧をアブラハムに与えてくれます。榿の木は神のもとで生きるアブラハムの生活を象徴するものだったのです。

キリストの苦しみの欠けたところ

第二朗読は『コロサイの信徒への手紙』からです。ローマで獄中にあったパウロのもとに、コロサイの教会の実状を知らせる手紙がエパfrasからもたらされました（1章7節）。当時のコロサイの教会はパウロが伝えた福音とはかけ離れた教えに魅了されていたのです。それは、「巧みな議論」（2章4節）、「人間の言い伝え

にすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事」(2章8節)と呼ばれるものでした。コロサイの教会の信徒達に欠けていたのは、キリストの苦難を自分の身に背負うことでした。

そこで24節の「キリストの苦しみの欠けたところ」という表現が大切になってくるでしょう。この表現をキリストが忍んだ苦しみという意味で理解してしまうと、キリストの苦難は不足していて、その不足分をパウロが補うことになります。しかし、救いをもたらすために主イエス・キリストが忍んだ苦しみは完全であるはずで、キリストにおける苦難、すなわちキリストにおいてわたしたちが忍ばなければならない苦難と理解してみたらどうでしょうか。主イエス・キリストの忍んだ苦難に倣って、教会共同体を築きあげるために必要な苦難がまだ欠けていると捉えたら分かりやすいと思います。

迎え入れた

今日の福音の箇所はイエスさまがエルサレムへと向かう旅の途中の出来事です。

先週の福音朗読では律法の専門家がイエスさまに質問しました。「どうすれば、永遠の命を得ることができますか」(10章25節)。これに対する答えは「神である主を愛せよ、また隣人をあなた自身のように愛せよ」(27節)でした。そして先週の福音の「善きサマリア人」のたとえでは隣人への愛が具体的に説明されています。今週の福音では「マルタとマリア」によって「神を愛する」ことが示されます。このふたつの物語によって「永遠の命」への道が示されるのです。

38節の「迎え入れた」をここに留めてください。当時のユダヤ人社会では、男性が親族以外の女性と一対一で接したり、女性が男性を家に迎え入れてもてなしたりすることは普通のことでなかったそうです。スキャンダラスなことだったようです。しかしイエスさまを迎え入れたのは、習慣に反してマルタの方でした。つまり、マルタにはイエスさまを迎え入れ、イエスさまのそばにいたいという想いがあったのです。この点は福音を味わう上で大切だと思います。

まとめ

40節では、そのマルタが「せわしく立ち働く」とあります。これはギリシア語では「ペリスパオー」ですが、「周囲に」を表す接頭辞「ペリ」に「引き離す」を表す「スパオー」が結びついた動詞です。元々の意味は「あるべき中心から周りの方へと引き離されている」ことを表すそうです。そこから、その人の注意や関心があることから、別のことへと向くという意味が生じます。マルタの心の中心にあったのはイエスさまのそばにいて、イエスさまから教をいただきたいでした。しかし、いつの間にか関心がイエスさまへのもてなしへと移ってしまったのです。

さらに、同じ節の「手伝う」も面白い表現です。これは元々は「ある者の側に加わる」という意味です。そこから、「味方する」という意味へと展開していきました。このマルタの発言から、マルタはイエスさまからマリアを引き離し、自分の側につかせようとしている意図が見え隠れします。

教会は、人間的な側面をもった団体です。ですから、そこに集う人々の間にいろいろな想いが交差します。

多くの方々は、信徒であれ修道者であれ、司祭であれ、マルタのようにイエスさまのそばにいたいと願っています。しかし、目の前のやるべきことが迫ってくると「せわしく立ち働く」ようになり、自分の中心にあったイエスさまをいつの間にか忘れてしまいます。それどころか、相手に「手伝う」ことすら要求します。それは相手をイエスさまから引き離そうとする悪意があるように思います。そんな本当に人間的な想いが交差する教会にあって、イエスさまは優しく「大切なもの」を選びなさいと教えてくれるのです。

それではまた来週。